

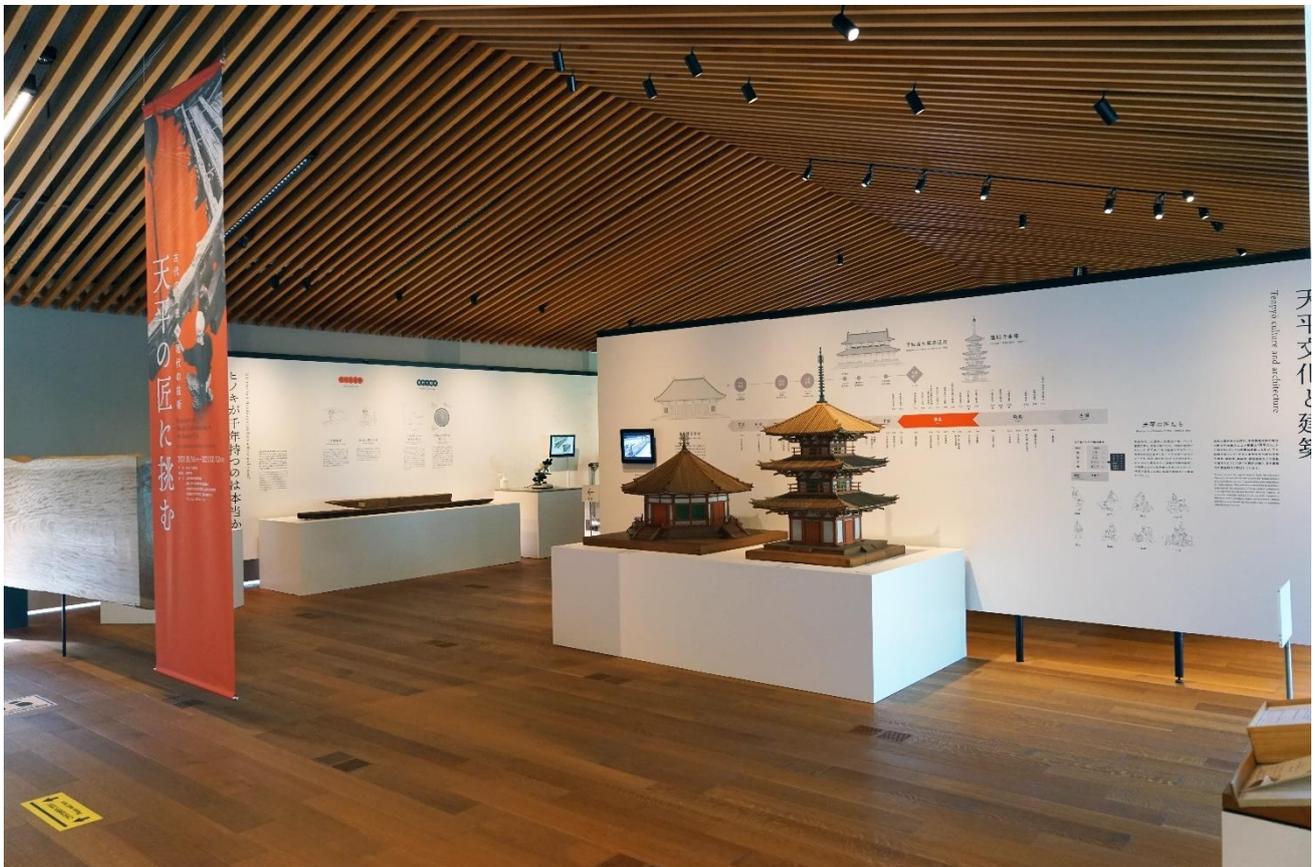
# 天平の匠に挑む展・フォトレポート

## Photoreport

本年12月12日（日）まで開催の神戸会場の様子をフォトレポートでお届けします。

東京会場は緊急事態宣言下の開催となりましたが、こちらの神戸会場では宣言が解除され、無事に開催することができました。

企画展では、伝統木造建築の保存修理において科学技術を駆使して謎の解明に取り組む研究者・技術者の知恵に注目し、唐招提寺金堂の平成大修理をテーマに建築技術・木材・彩色などの観点から紹介しています。



最初の「天平文化と建築」コーナーでは天平時代の建築を年表で紹介し、古代の造営組織などについても解説しています。



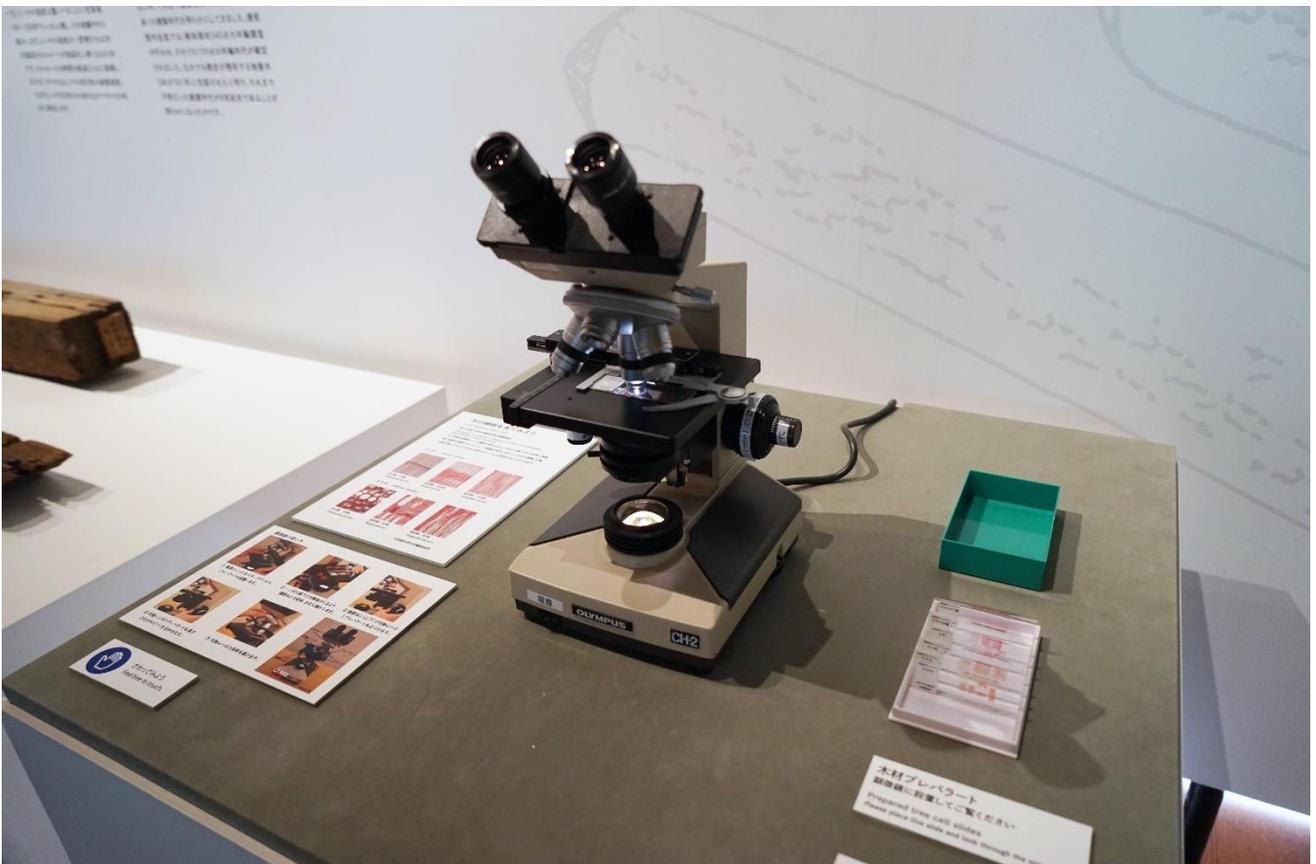
こちらは法起寺三重塔（706年）と法隆寺東院夢殿（739年）の二十分の一模型。いずれも建築史研究者・近藤豊氏の製作と伝えられており、精巧な技術に驚かされます。



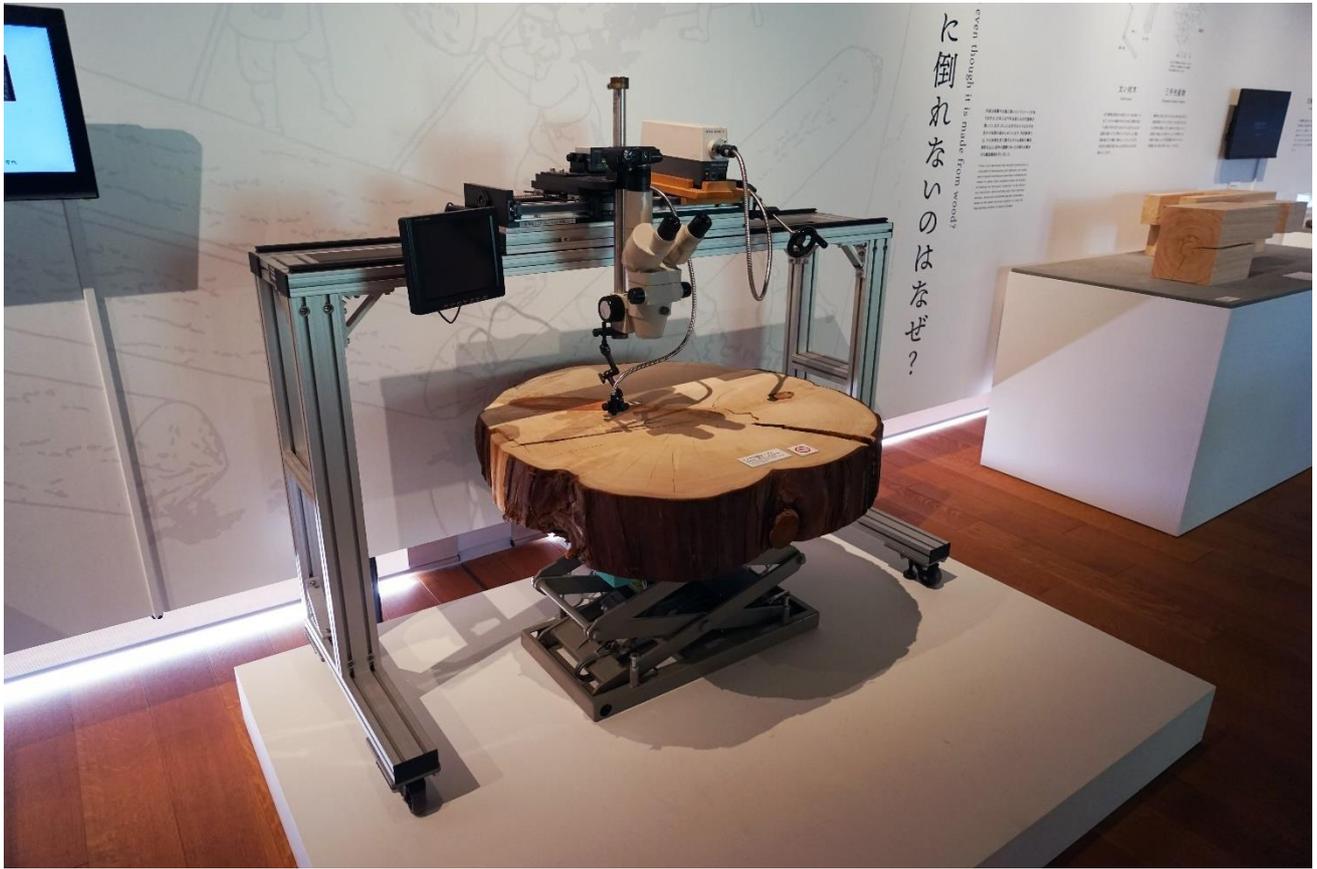
「ヒノキが千年持つのは本当か？」コーナー。千年以上も建築を支え続けてきた建築部材の実物を展示しています（全てヒノキ、唐招提寺蔵）。



木材のなかでも抜群の耐久性をもつヒノキ古材の、年輪の細かさや加工の痕まで間近で見ることができます。

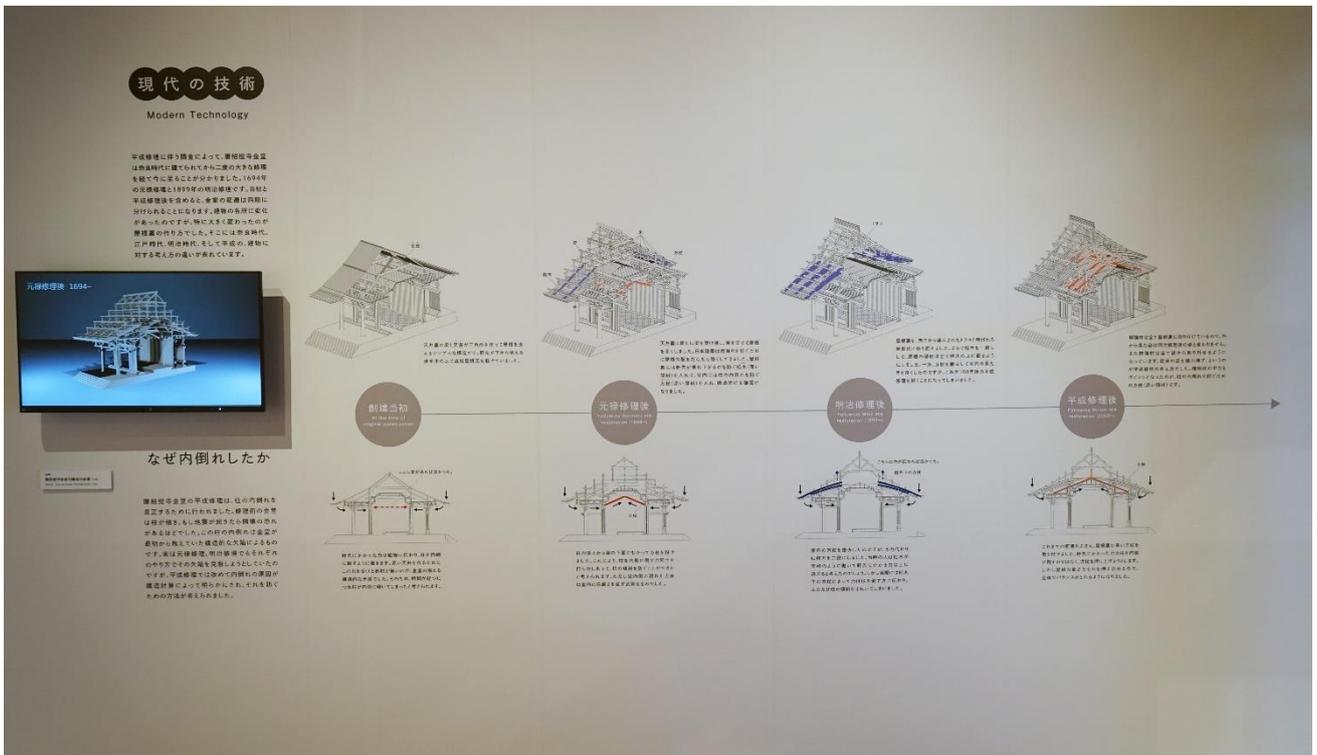


こちらは顕微鏡体験コーナー。ヒノキ・ケヤキ・スギなど木材プレパレート標本の細胞を覗いてみるすることができます。文化財の樹種同定と同じ手法で、細胞の違いを確認してみましょう。



こちらは木材の年輪幅を測定するための機材・年輪読取器（奈良文化財研究所蔵）。唐招提寺金堂の年輪年代測定の際に、実際に使用されたものです。

年輪年代学は、数多くの文化財の時代判定に貢献している注目の研究分野です。唐招提寺金堂では地垂木3本が781年に伐採されたと判り、建立年代がほぼ確実になりました。



創建当初から元禄・明治・平成時代と過去3回の修理を経た、唐招提寺金堂の構造変遷図。変遷図とアニメーション映像で、なぜ柱の内倒れが起こったのかわかります。



こちらの唐招提寺金堂部分模型（縮尺三分の一）は、大阪工業技術専門学校の卒業制作として製作された作品です。専門学校の方が組み立てていただきました！明治修理後の枯木が入った構造が再現されていますので、当館常設展にある実物大模型（創建当初復元型）とぜひ見比べてみてください。

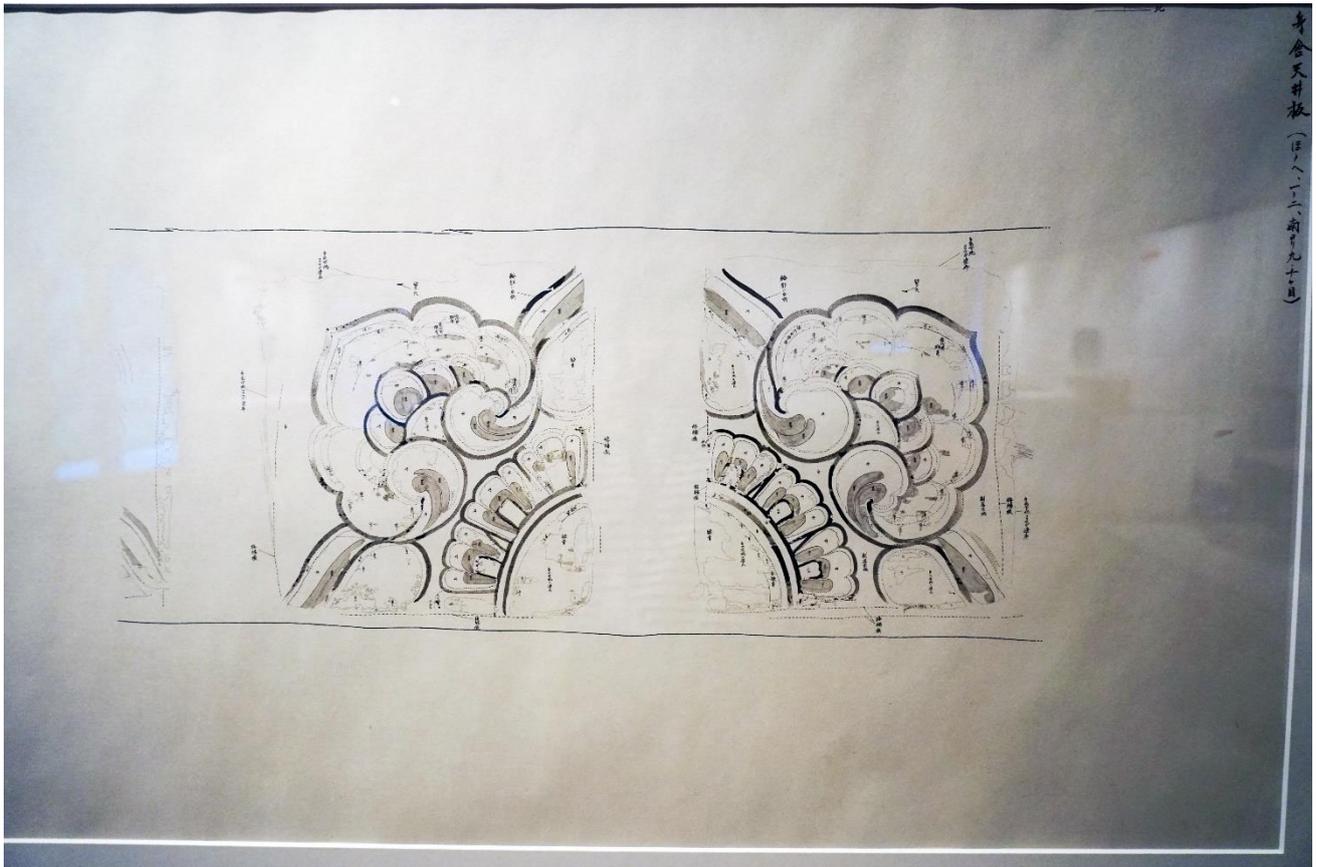


こちらは古代の鎌継ぎの再現展示と、製作に使用したチョウナ・ヤリガンナ・ノミ。  
唐招提寺の鎌継ぎをサンプルに、古材に残る加工痕を参考にして、大工道具にもこだわって製作しました。



こちらの「天平の葺に挑む」コーナーでは、唐招提寺創建当初の瓦と現代の復原瓦を並べて展示しています。

古代の瓦の表面には、型にかがせていた布の痕などがはっきりと残されています。復原瓦のうち平瓦は、桶巻作りと呼ばれる古代瓦の製法で再現したもので、製作の様子を映像で見ることができます。



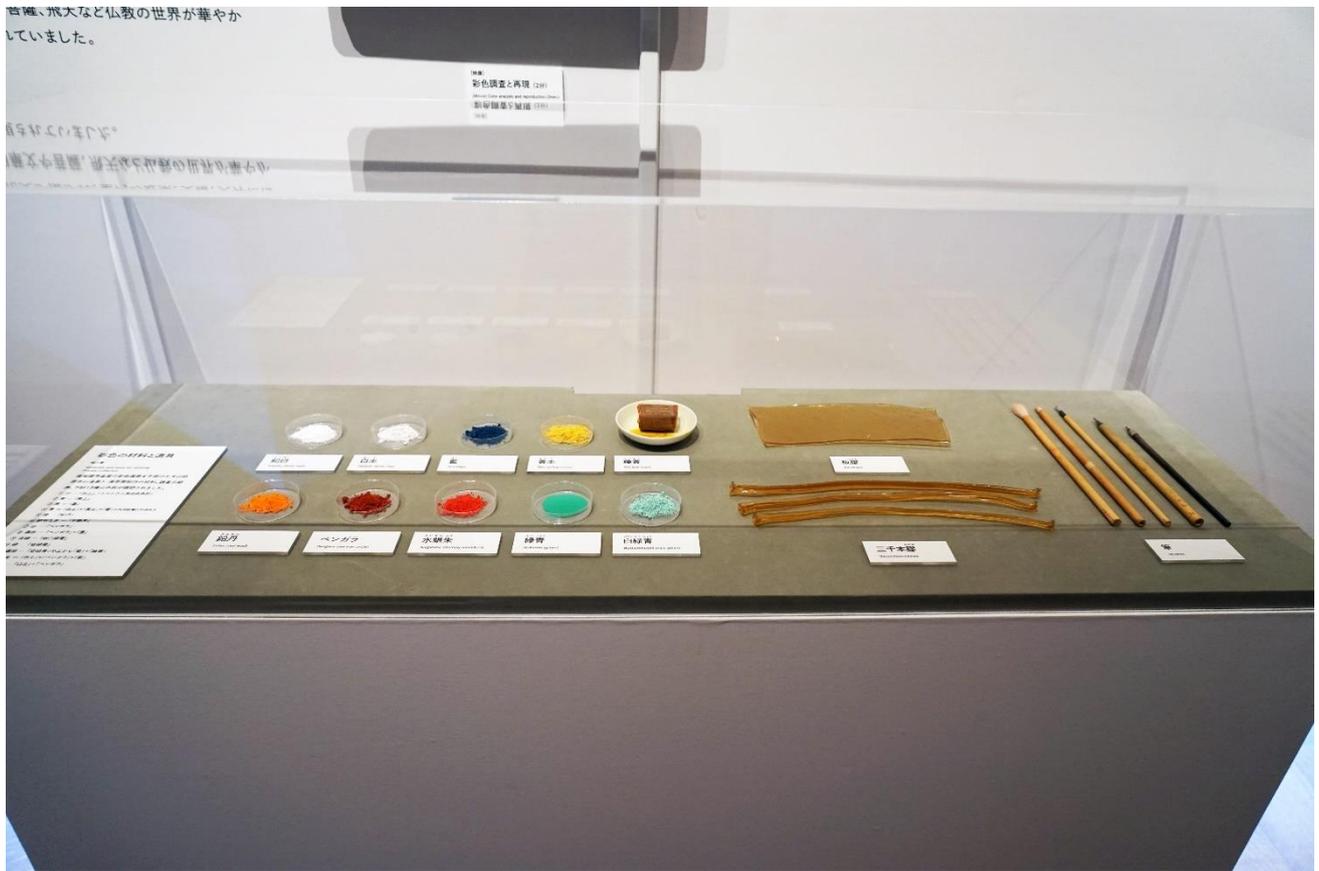
最後は彩色コーナー。

実物大の彩色復原模型、彩色復原図、そして調査時に制作された白描図（はくびょうず）を展示しています。かつて唐招提寺金堂の天井が鮮やかに彩られていた様子が VR 映像で再現されています。



北京王府井大街

北京王府井大街



こちらは唐招提寺金堂の彩色復原を手掛けられた大山明彦氏の道具と彩色の材料です。丹念な調査を通じて13種の色料が確認され、彩色を復原することができました。

このほか映像コンテンツも充実し、さらに理解を深めることができます。ぜひ会場へ足をお運びください。